



中谷宇吉郎 雪の科学館 通信

NAKAYA UKICHIRO
MUSEUM OF
SNOW AND ICE

第 15 号

2008(平成20).3.31

発行 / 中谷宇吉郎 雪の科学館

〒922-0411 石川県加賀市潮津町イ106番地

TEL 0761-75-3323 FAX 0761-75-8088

URL ▶ <http://www.city.kaga.ishikawa.jp/yuki/>

E-mail ▶ yuki-mus@angel.ocn.jp

平成20年度の主な流れ

■ 特別展「北極圏 アラスカ」 7/17～10/28に開催

中谷博士はアラスカの氷河氷で氷の研究を行い、北極圏へも出かけました。博士の足跡をたどり、オーロラ、氷河、動植物などアラスカの雄大な自然を紹介し、近年の環境変化についても触れます。人工オーロラの実験も毎日公開。



▲ オーロラ (撮影: J.Curtis)

▼ 人工オーロラ
(装置: 南繁行教授)



▲ タテゴトアザラシ (撮影: 星野道夫)

▼ カスカウルシユ氷河 (撮影: Austin Post)



■ 第5回雪のデザイン賞、12月に募集開始

今回新たに「ラネージュ賞」が設けられます。募集開始は12月、締切りは来年4月末、審査、表彰、展示は21年度に実施の予定です。(→9～11頁)

■ 中谷宇吉郎科学奨励賞 中学生対象に全国から

今年度から全国の中学生から科学研究作品を募集し、優秀な生徒1名に授与されます。賞には「加賀市の小学生」、「雪氷学の若手研究者」の部門もあります。(→14頁)

■ 8月2・3日に早朝開館、3日は「子ども雪博士まつり」

科教協全国大会 (in片山津) を歓迎し、早朝開館 (6時半～8時) など特別態勢で臨みます。(→2頁)

8月3日の「まつり」には、実験・工作・お話のコーナーがたくさんでき、「子ども一日館長」が今年も登場予定。親子で事前に申し込み、当日大人も入館無料になります。(→12～13頁)

英国・ウィルソン家から75年ぶり帰郷

「霧箱」で有名なノーベル賞科学者ウィルソンと宇吉郎の交流を示す手紙や写真が遺族から返贈され、日本への運搬役を果たされた理化学研究所の櫻井博儀氏(右端)から、神田館長が受け取りました。(→5頁)

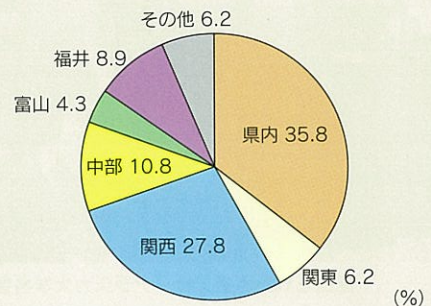


入館者40万人

40万人目は福井県鯖江市から家族と来館した栗田健太郎君(5才)で、大幸市長から花束と写真集などが贈られました。2007年8月4日、開館から12年9ヶ月目でした。

入館者の4割近くが関西・中部から

2006年11月から1年間実施した「どちらから？」アンケート(回答率70%)の結果、入館者の実態や今後の課題が見えてきました。(→14頁)



▶ 科教協全国大会 8/2~4片山津温泉で 雪の科学館は早朝開館などで歓迎

この夏、片山津温泉で科学教育研究協議会の全国大会が開催されます。小中高校の理科の先生など約500人が集まり、教育研究の発表や交流をする大会です。

大会にむけて、科学の活動で片山津温泉地域の活性化に取り組む大学教授や高校教師らを中心に実行委員会が作られ、地域の団体とともに当館も共催します。

大会参加者は昼間あまり外出できないことを考慮し、当館は2日と3日に早朝開館（6時半～8時）するなど特別態勢をとり、宇吉郎や雪・氷の魅力を紹介します。

昨年の大会は名古屋の中京大学で開催され、今年の歓迎準備のため片山津温泉から出かけた視察団に館も参加しました。写真は、実験紹介や教材頒布のために沢山のコーナーが設けられた「お楽しみ広場」の様子です。今年の「お楽しみ広場」は8月2日の午前、片山津地区会館

の内外で行われ、当館も出展します。親子など一般の参加も歓迎しています。



科教協の「お楽しみ広場」（2007.8.3 中京大学で）

▶ 特別展「北極圏 アラスカ」・・・国際協力、体験、地球環境 柱に

7月17日開始予定（10月28日まで）の「北極圏 アラスカ」展は、宇吉郎のアラスカや北極圏での研究活動を背景に、オーロラについては、アラスカ大学名誉教授の赤祖父俊一氏の御協力を得て、野生動物は星野道夫の写真により、そして、氷河はアメリカの写真家や日本人科学者の研究を通じて紹介し、アラスカの雄大な自然を中心に紹介する予定です。

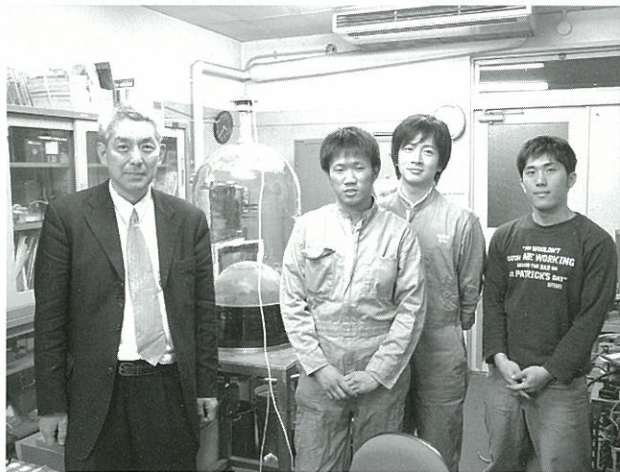
この展示には、アラスカ(アメリカ)など国際的協力が

あり、オーロラの実験による体験的理解も重視し、氷河の後退など地球環境問題にも関わるものにしていく予定です。

2007年10月27日に、アラスカから赤祖父俊一氏ご夫妻が来館され、展示構想を具体化するよい機縁になりました。その後、3月13日、オーロラ実験で有名な大阪市大の南繁行教授を館長が訪ね、実験装置の貸し出しで快諾をえました



来館された赤祖父俊一アラスカ大学名誉教授



大阪市大の南繁行教授（左）と人工オーロラ装置（その右）。
研究室の院生3人とともに

「白山の雪形を愛する会」 橘小で特別授業

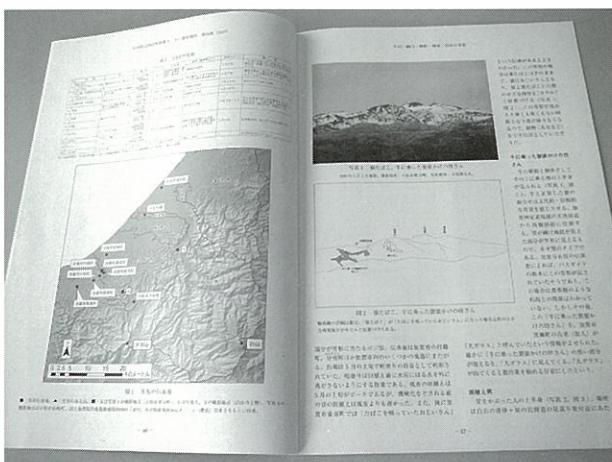
2007年4月21日、白山の雪形に関心を持つ人が館に集い、「愛する会」ができました。会には、加賀市・小松市・白山市・川北町などの10名余が先ず加わり、雪形の時期などに数回会合を持ち、伝承調べや子ども・市民への普及などで輪を広げようと話し合われました。

そして、5月11日、川北町立橘小学校の協力をえて、同校の5・6年生に特別授業を行いました。授業は防災科学技術研究所（つくば市）の納口恭明氏、白山自然保護センターの小川弘司氏、神田館長が行い、その他4名の「愛する会」メンバーも参加しました。橘小の子ども達はその後、家に帰ってから父母や祖父母から雪形伝承についての聞き取り調査を行いました。

白山の雪形について論文を共同執筆

白山の雪形について、館は4年前から関係者と協力して伝承の発掘に取り組んできましたが、これが論文にまとまりました。

白山自然保護センターの研究報告第34号に載った9ページの論文は、同センターの小川氏を中心に、納口氏、和泉氏と神田館長が共同で執筆したものです。論文では、初めて伝承を確認した2004年以降の経過を踏まえ、10の雪形について解説し、分校小（2004年）や橘小の子どもたちによる聞き取り調査の成果も生かしたものになっています。



「白山の雪形」の論文

目次

20年度の主な流れ、「北極圏 アラスカ」ほか 英国ウィルソン家から 入館者40万人 4割が関西・中部から	1
片山津で科教協全国大会、アラスカ展	2
白山の雪形 磯崎新氏講演会	3
19年度報告 企画展+関連	4~5
座談会「宇吉郎と科学教育」の発言より 結城千代子・大野正雄	6~8
第4回雪のデザイン賞	9~11
子ども雪博士教室	12~13
科学奨励賞、「どちらから？」の結果	14
館の対外的な活動、内浦公民館	15
ラトビアとの交流	16
韓国との交流	17
「先生のご葬儀の思い出」(小林寿太郎)	18
1枚の写真から、編集後記	19
20年度の行事予定	20

磯崎新氏を迎え、6/28に講演会

例年宇吉郎の誕生日（7月4日）の近くの土曜日に開催している「私の宇吉郎」シリーズの講演会を、今年は当館の建築設計を担当された磯崎新氏をお招きして、6月28日（土）に開催します。世界で活躍されている磯崎氏の講演に、期待が高まっています。



磯崎新 講演会

雪をうける両の掌ー私の建築論

日時 2008 6月28日(土) 午後1時15分

会場 片山津地区会館テリーナホール

入場無料

◆問い合わせ先◆ 中谷宇吉郎雪の科学館
TEL 0761-75-3323
〒922-0411 石川県加賀市瀬野町イ106番地
http://city.kaga.lshikawa.jp/yuki/




中谷宇吉郎雪の科学館主催「私の宇吉郎」シリーズの
 建築家 磯崎新 講演会

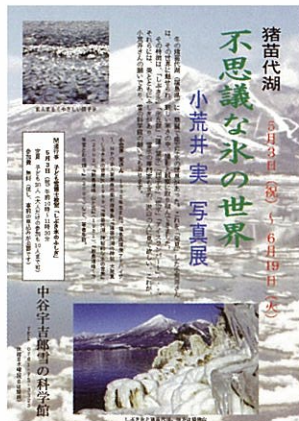
1. 白山の雪形
～自然がつくり、人が見たてた雪のデザイン～
(3/1)～5/1

前年度からの継続で、第4回雪のデザイン賞募集との関連で開催しました。会期中の入場者は4,342名。

2. 「猪苗代湖 不思議な氷の世界」
小荒井実写真展 5/3～6/19

小荒井実氏(福島県)は、冬の猪苗代湖の一角にふしぎな湖氷が発達することを「発見」し、研究や紹介活動を続けてこられました。

湖氷の写真40点を展示し、関連して、初日に、小荒井氏による「子ども雪博士教室」を開催しました。会期中の入場者は2,964名。



2階の展示ギャラリーで。左から2人目が小荒井氏

3. 企画展「宇吉郎と教科書」 6/21～9/4

同時開催①〈生誕百年〉湯川博士と宇吉郎
②「親愛なるウィルソン教授」里帰りした手紙と写真

19年度から、冒頭5ページで宇吉郎の研究が紹介された中学校の理科教科書(東京書籍)が使用されていることを契機に、国語教科書等への宇吉郎の随筆掲載の歴史や、宇吉郎が編修・執筆した教科書『自然』などを紹介しました。

同時開催①では、2人の絵と短歌による交流を、②では、英国のウィルソンの孫から資料が返贈された機会に、2人の交流を紹介しました。会期中の入場者は6,350名。



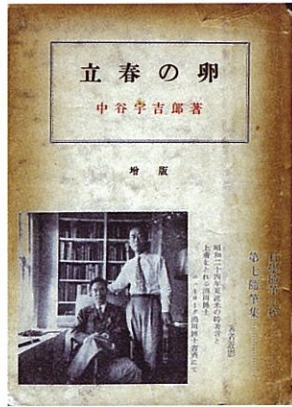
2階の展示。名作の教科書ページを大サイズで読み、朗読テープも聞けるようにした



宇吉郎の随筆が初めて載った教科書や、与謝野晶子からの掲載依頼の手紙も紹介した



与謝野晶子著のこの教科書(昭和13年1月発行)に「雪雑記」が載り、これが宇吉郎の随筆が教科書に載った最初と考えられる



湯川秀樹と宇吉郎が一緒に写真がカバーに載った珍しい版(昭和26年5月発行)の『立春の卵』



ウィルソン家から返贈された資料などで2人の交流を紹介した



湯川秀樹と宇吉郎の交流を示す2つの掛軸。左は、宇吉郎の雪の墨絵に、秀樹が宇吉郎の学士院賞受賞を祝った短歌を書き添えたもの。右は両家の夫妻4人による合作

4. 公開座談会(私の宇吉郎シリーズ⑧)「宇吉郎と科学教育」(6~8頁)

2007年6月30日(土)、会場:テリーナホール
講師:結城千代子(ママとサイエンス主宰)、大野正雄(アジア・アフリカ国際理解センター主宰)、公下隆(片山津小学校教諭)、神田健三(館長)

企画展「宇吉郎と教科書」との関連で開催しました。スライドでの館の近況紹介、片山津コーラスの合唱に続き、座談会に移りました。出席者は50名。その後、友の会総会と懇親会が行われました。



5. 「雪の科学館と雪・氷 潮津保&操子写真展」9/6~10/29

館の近くに住むという好条件を活かして、館やその周辺の折々の写真を撮りためてこられた潮津夫妻の作品33点を展示しました。

会期中の入場者は3,562名。



2階の展示風景

6. 第4回雪のデザイン賞入選作品展 11/1~2008/2/19

(→9~11ページに詳報)

会期中の入場者は8,205名でした。

公開座談会「宇吉郎と科学教育」(→5頁)での発言より(抜粋)

結城千代子さん

この教科書は現在中学校で使われている理科1分野の上巻、つまり中学1年生が最初に手にする、理科の中でも物理化学分野の教科書ですが、プロローグで宇吉郎の研究を紹介した理科教科書最初の5ページで、中谷宇吉郎先生の仕事を取り上げさせて頂きました。

2003年頃、東京書籍から相談を受け、教科書のプロローグとして、子供達に探求のやり方、どういう風に研究を始め、それをどういうふうに進めて、まとめて、最後の報告をどういう形にするか、これらを紹介して欲しいということでした。考えた末、それらの内容を、実際の科学者を話題に取り上げて、さわりだけでも研究の流れを紹介しながら、自分たちもどういうふうに研究していけばいいのかを教える、という内容にしようと考えました。

では、誰を取り上げるかと、よくよく検討した末に、中谷先生を取り上げさせて頂きました。中谷先生のご研究は、内容は非常に深いんですが、一見子供達にも取り付ける、その端緒があるということもあり、紙面の美しさも重要ということもあり、又、私個人の思い入れもございました。

最初に疑問を持つ、それから課題設定、情報収集、そういう形での探求の進め方を書いてありますが、それと同時に中谷先生が実際に雪の結晶の研究をなさった時もやはりこういう形で、疑問を持たれ、課題設定や情報収集をなされ、仮説、観察、実験の計画、そして観察、実験結果を得る、とすすめられた、そういった話を、物語的に、並行して紹介する仕方を取らせて頂きました。

一方で、そういった探求の手法を学ぶだけでなく、実は、私自身中谷先生がたくさんの随筆の中に残されたメッセージを非常に重視しておりましたので、それらをさりげなくあちらこちらに、あまり字数が多くなつては困るので控え目ですが、たくさんのメッセージを取り入れてまいりました。



結城千代子さん

「驚きがなければ科学は始まらない 宇吉郎」

中谷先生のお遺しになった沢山のメッセージの中でも、特にこの言葉は大切だと思います。

昨日、飛行機で参りましたが、羽田空港でちょっと時間があつたのでコーヒーを飲んでおりましたら、その少し先に、室内ですが噴水があつて、小学校1年くらいの子供が1人立っていて、じーっと噴水を見ていたんですね。私がコーヒーを飲んでいる間中、ただひたすら噴水を見ているんです。私、視力が異常にいいものですから、その子供をよく見ていたら、その子の視線が噴水の水滴にあちこち行ったり来たりするんです。噴水の下にも灯りがついていて、そこがキラキラと光るんだと思うんですね、ハッ、ハッとこういう風に見ているんです。それを飽きずに、10分以上、ただひたすら見ていた、そんな子供の風景に出会いました。その時に、本当に今の子供も、そんなのを延々と見ていて、ワアッと思える心をちゃんと持っているということをすごく思いました。

私がこのような場でお話をさせて頂く時、昆虫記を書いたファーブルの幼い頃の姿を描いた一文をよく紹介させて頂くんですが、その子供の姿を見ていた時、ファーブルの一文を思い出しましたので、読ませて頂きます。

「素足の少年は、」これはファーブルのことなんですが、「山の東側の斜面にたたずんで、目のくらむような眩しい太陽を眺めた。少年は固く瞼を閉じる。すると、太陽は見えなくなる。けれども、もし口をいっぱい大きく開いたら、太陽が見えるだろうか。口を開けても太陽は全く見えなかった。ただ暖かくなるだけだった。何回も自分で実験を繰り返して、口では太陽が見えないという結果を出した。」

これは下手をすれば、大人の目から見て馬鹿馬鹿しい、何してんのこの子、ちょっと大丈夫?と言いたくなるような場面かもしれません。でもその子にとっては、そのわずかな時間は代えがたい大切なものだったんじゃないかなと思うんです。その話の続きの所で、これはいろいろな説があるそうで、ここでは祖母ということになっているんですけども、「アンリ(ファーブルのことです)は、夕方になると意気揚々と一日の自分の発見や実験や観察の成果を報告する。祖母は孫の無邪気な話を微笑みながら聞いていた。他の大人達は、幼い思考の目を摘み取ってしまうように聞き流したり、あからさまに笑ったりした。」こういう記述がございます。

この話題を取り上げてらっしゃる『実験科学の精神』という本をお書きなつた高田誠二先生は、その後の方で、学会で登壇した経験のある方が、自分の報告が微笑みを誘っているか、聞き流されたり、笑い飛ばされたりしているか、生きるか死ぬほどの関心事として胸に留まっているのか、とついでにお書きになっていて、なかなかその通りで、今、私の話も笑い飛ばされているのか、聞いて頂けているのか、と思つて

しまう、そういう重要な感情、それが小さな子供の幼い芽にも非常に大きく影響を与えるんじゃないかなと思います。噴水をじっと見ていたその少年の親御さんがどういう方なのか、私は全然存じませんが、ただあの子の十数分の後、もしも飛んで帰って「あの噴水のしずくがすごくきれいだったよ」、そういう風的一所懸命報告した時に「馬鹿言っていないでこっちへ来なさい」と言われるか、「本当！すごかったね」と言っただけか、これだけで全く違ったその子の人生が先に開けるのではないかなと思います。

「驚きがあれば科学は始まらない」という中谷先生のメッセージは、もちろん子供や科学を志す人々をサポートする重要な言葉だと思いますけれども、それだけではなく、これから科学の芽を伸ばしていく子供達を支える大人側、あるいは教員側、こちらにも非常に強いメッセージ性を持っていると思ひまして、私は特にプロローグを、教科書ですから子供達の為の本なんですけど、同時に先生に向けて、このメッセージを載せさせて頂いたつもりです。

「不思議を解決するばかりが科学ではなく、平凡な世界の中に不思議を感じることも科学の重要な要素であろう 宇吉郎」

不思議を感じるというのはなかなか難しいんですよね、今は、特に大人になってくると。それだけでなく今の子供も情報が非常に多い。その多い情報の中で不思議を感じるというのは非常に難しい。それでも私、子供達の為に少しでも何かしたいなど、自分の子供が小さいときに思ったものですから、「ふしぎ新聞」という子供向けの新聞を発行しています。これは、幼稚園とか小学校低学年の子供達に配布するようになっていたのですが、表のページが子供用に理科の不思議、子供の誰かが持った理科の不思議を取り上げ、簡単に解説をして、中の方のページに、一緒にそれを見てあげる親御さんが自分としては一応知っていたい、それを全部教えるということではなくて、自分がその子供の持った不思議のことに、ちょっとは自分の中に答えを持っていたいという思いがあたりだと思ふので、その解説を載せるという形のページで構成したもので、ここ7年くらい続いております。ホームページからもダウンロードできるようになっておりまして、ホームページでは子供達の自由研究、中学、高校生の自由研究がいろいろと興味深いものを選ばせて頂いて紹介している、そんな活動をちょっとしています。

その所で、小さな子供達がすごく他愛ないけれども重要なことをたくさんしている、それを、親御さんや周囲の大人達が、すごく大切な意味を持っていると意識していただければ、それだけで支えられると思います。

私がとても気に入っているのは、ある2歳の男の子がお母さんにだっこされている時に、お母さんの顔を見て言ったそうなんです。その男の子ユウマくんっていったんですけど、「ママの目にユウマが映っているよ」。これは光の反射で理科1分野で言ったら冒頭に出てくる話なんですけど、2歳くらい

の男の子でもママの目にユウマが映っていると気がつきます。そこでそれは光の反射だよと教える必要なんか全然ないんです。そういったことに気がついたということ、そこにワッと驚けたということ、その重要性をぜひ大人の方達に伝えてもらいたいな、とそんなふうに思ひまして、中谷先生の言葉をいくつか本で紹介しました。

こういうふうな小さな観察、こういう中谷先生のメッセージに現れてくる重要なこと、それを教科書で、子供だけでなく大人にも伝えていきたい、それはすごく重要なことだと思っています。

子供がいろいろな疑問を持って研究を進めていくということで、中谷先生が随筆や『自然』の教科書の中で取り上げて非常に評価なさっていた自由学園の霜柱の研究というものがござります。

中谷先生が霜柱の研究について述べられたことのいくつかある中から、私なりに特に重要と思われる内容を挙げてみたいと思います。

一番重要なことは純粋な興味を持つということ。

第二には熱心さを持つこと。

第三には思いついたことを、億劫がらずにすぐ試みてみる頭の勤勉さをもつこと。

第四には偶然に遭遇した現象をよく捕え、それを見逃さぬこと。研究の全体に通じてある直感的な推理を働かすこと。

これらは現代にも通用するメッセージだと思います。こういったものを、本当に伝えていく必要があるだろう、それは生徒だけではなく、それを指導する側にぜひ伝えておきたいものだと思います。ですから中谷先生のお仕事そのもの、メッセージそのもの全てが教科書だと私は思っております。

大野正雄氏

私は現在中東博物館という館におりまして、イラン、トルコ、そしてパキスタンも、インダス川の西側を中東と言うんですが、私はそこに8年ばかりおりました。全部イスラムの国ですから、私の顔つきもイスラム風になってきた、とこういうわけであります。私の博物館に、結城先生、神田先生もお見えになりましてご案内したときの写真です。この机はパキ



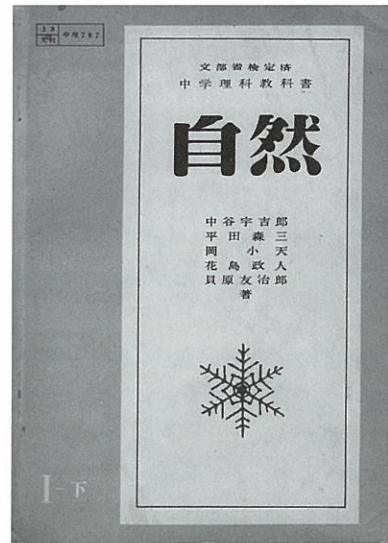
中東博物館で、大野正雄氏(右)と結城さん (2007.5.8)

スタン製の机で、そこに並んでいるのは中谷宇吉郎先生の本です。このスタイルはパキスタン風のチョッキでして、そのチョッキで今日も現れたんですが、この席では敬意を表してちゃんとした長袖のものにしました。

1947年ですからもう60年前の話です。私は19歳、旧制高校の2年生でしたが、寺田寅彦の「天災と国防」という本を読みました。実は国防に引かれて私はその本を手にしたんです。といいますのは、私はその戦争中は軍の学校で最も先端的な軍国少年でありまして、国防に目を注いでこの本を手にしたんです。で、中を見ましたところ、この国防は、天災から国を守るには科学の勉強をしなきゃいかんのだということでした。その他いろいろと随想等が書かれていたわけです。最も私が感動した随筆に「地図を眺めて」というのでありました。「どうせ物は・・・と、安い物を列挙すると、5万分の1の地図がそれにあたる、というような感じで書かれておまして、私は寅彦がすっかり好きになり、随筆集を集めた。その内に中谷先生の書かれた『寺田寅彦の追想』という本に出会って、それを読んでいる内、ちょっと中谷先生に手紙を出したくなったというわけです。そして「寺田寅彦没後の門人にして欲しい」と手紙を書いた。中谷先生の弟子にして下さい、じゃなくて、寺田先生の没後の門人にして下さい、と。そしたら返事を頂戴いたしました。

それから、大学の卒業が近づいていた頃、私は中学校の理科の先生になる決心をしました、とお手紙を書いたんです。私は工学部だったのですが、昔は旧制で教育課程を取らないで教員になれたものですから、私は中学校の先生になりましたということの中谷先生にお手紙したんです。そしたら、私は埼玉県の浦和の出身ですが、浦和の埼玉高校に私の大学時代の友人の室井先生が校長をしている所に講演に行きますと。そこでできたらお会いしましょうというお手紙なんですね。日にちなんかは室井先生に電話して下さいと書かれて、電話番号まで書いてありました。そういうことで中谷先生にお目に掛かったわけです。まあ、非常な感激でした。これで私は中谷先生の弟子の気分になれたなあと考えた次第です。講演会の後の座談会で、私も中谷先生の側で、話の糸口をリサーチしたわけですが、その後、玄関で中谷先生の写真を撮らせてもらいました。そんなことで、私は教員になりました。

理科の教員になり、1951年の最初の授業の後、お手紙を出しました。そうしたら、「5月1日メーデーの日に雪が降りました。第一回の講義の日の感想をありがとう。その最初の時間の印象を、10年持ち続ければ大抵の人は日本一の教育者になれます。日本一にならなくてもいいから、3年くらいにまけておきます」と、私が教員になったことへのお祝いということで頂戴したんですね。嬉しかったです。これはもう、10年くらい頑張らないと。そういうふうなことでありました。



宇吉郎が編集・執筆した教科書『自然』

それから3年後くらいですね、出版社から『自然』が3年分送られてきました。これは中谷先生が編集・執筆された教科書ですが、これを開いてみると、それまで私が使っていた教科書とは目次自体が大きな違いがありました。その違いについては簡単に申し上げますと、中谷先生は、中学校で義務教育が終わりですから、義務教育での理科は、その国のことをよく知ることが大事だということで、1学年の所では、動物や植物から入るのは普通なんですが、1年の後半で「日本の風土」というテーマで、地震のことや、災害学習ということで、これはまさに寺田寅彦の「天災と国防」の精神がこの教科書に出てるなあとつくづく感じたわけです。災害として、地震、風水害、火災、治山治水というようなことが、一つの大きなテーマとして1学年から出てくる。3学年では「日本の資源」、日本は資源の少ない国だと言われているわけですがそうではない。日本には水力資源がある。これを十分に活用しなきゃいかんということで、水力資源のことがいろいろ書いてある。ダムは埋没のことまで教科書に書いてある。砂がダムに入ってきて使えなくなる、その、ダムの埋没のことまで触れています。私は自分が使っている教科書そっちのけでこの話をしましたが、これは子供達に非常に影響を与えてまして、理科の授業のことではダムの埋没のことを感慨深く覚えている。その子供達ももう70歳になっていますけど、私が79歳ですから。中谷先生が取り持つ縁だなと思います。

そんなことで私はこの教科書に対して非常に敬意を持っております。これは一つのヒロソフィーがそこにあると思います。単に知識の吸収ということではなくて、物の考え方、これを非常に大事しなければいかんという、いわば理科教育、科学教育の哲学というかヒロソフィーという言い方をした方がいいんじゃないか、と、それが私は『自然』の教科書に感じたことであります。

419点の応募は過去最多 光るラトビア人の積極参加

第4回雪のデザイン賞は、加賀市と山中町の合併に伴って1年間お休みした後、2007年1月1日から5月31日まで募集しました。その後、7月13日に一次審査、9月20日に最終審査を市民会館で行い、入賞・入選を決めました。入選作品展は11月1日から2008年2月19日まで雪の科学館で開催し、11月3日に表彰式を行いました。

今回は356の個人・団体から計419点の応募があり、応募者数・応募数ともこれまでで最多となりました。このうちラトビアの20人から22点の応募があり、この中から、銀賞、奨励賞、佳作が各1点、入選が2点選ばれことが、大きな特徴でした。

今回は、応募の仕方を、作品を撮ったデジタル写真をCDで提出する方式に改めました。又、募集記念として、

写真展「ラトビアの冬」、特別陳列「雪華デザイン前田家ゆかりの刀鞘」、企画展「白山の雪形～自然が作り、人が見たた雪のデザイン～」を続けて開催し、募集の機運を盛り上げる試みをしました。

表彰式には全国から入賞・入選者ら14人が出席し、映像ホールで行われました。その後、展示された作品を見ながら出品者による列品解説が行われ、川上審査委員長からコメントが添えられました。その後、参加者の交流会を、喫茶・冬の華で行いました。

表彰式のために、銀賞のバイバ・リテーレがラトビアから来日し、市民と楽しく交流する機会もありました。(→16頁)



図録 (500円で販売中)

講評 審査委員長 川上 元美

一昨年、加賀市と山中町が合併して新たな加賀市へと生まれ変わりました。そのため、行政上の様々な要因により、一時この「雪のデザイン賞」も中断のやむなきにいたりしましたが、幸い担当各位のご努力により、第4回目として復活することができました。

間を置いたにも拘らず、419点と前回にも増して多くの応募を得たことは大変有難いことです。

特に今回は、一昨年にラトビア国立自然史博物館にて中谷宇吉郎博士の業績をテーマにした展覧会が開かれた事が縁となり、ラトビア国内でも積極的に広報され、ラトビアから22点もの力作が集まったのは、うれしい出来事でした。

また、応募項目に映像が加わり、予想以上の作品が寄せられましたが、今一つ入賞に至るものがなく、今後に期待します。

様々な素材や技術を用いたクラフトや、アイデアをこらしたデザインの応募作品が集まるなか、第一次審査を画像データで審査し、50数点を選出しました。そして実物での本審査で賞を決めるのは例年と同じ方法です。

回を重ねて、今回の全体のレベルは上がっているためか、賞を決めるに際して、上位のレベルが拮抗しているものの、抜きん出る作品が見当たらず、議論を尽した末に結局金賞を選出できず、銀賞が2点という異例の結果になりました。

その一つが、「CONNECTION」とタイトル付けされた、詩情豊かに雪の降る森の風景を細密に織り込んだタペストリーです。深々と降る雪の、そして、枝から散り舞う雪霞でしょうか、その力量は確かで心打つ印象的な作品です。これは、はじめて応募を得たラトビアからの作品でした。

もう一つは、「しもばしら」と表題のあるガラス皿、「ガラスの欠けた表情は雪や氷の儚さのようだ」と、霜柱が光を受けて刻々と遷ろうさまを、淡い色のガラスでお皿の造形に託したもので、ガラスのテクニクや表現方法が多様に存在するなかでも、素朴であるが新鮮な作品。

銅賞の「CRYSTAL CANDLE」はロウソクを雪の結晶の六花の形にデザインしたユニークなキャンドルです。「人知れず降り始めた雪、その一粒一粒にはちいさな炎が灯っている」と結晶の一つ一つを人の命の素に見立てた雪と炎のイメージが感動的です。

奨励賞には5作品が選ばれました。「UNRESTRAINED」、無拘束な、とても訳そうか、融け行く野の雪の変化を写し取った絵本。

「ゆきだるまスタンプ」は愛くるしい雪だるまの形をし、雪をはじめ、冬に関する様々な図柄が可愛い。

「Exterior View, Interior Expanses」はガラスのパート・ド・ベールの技法で、降り積もる雪氷が構築する建物に見立てて、外からの眺めと内からの広がり考察した美しい作品。

「First snow」、そして「雪の書」もユニークな作品でした。

佳作になった作品も奨励賞と僅差であり甲乙つけ難く、7点の作品が選ばれました。

また審査を終えた一週間後、富山市で雪氷学会が開催されました。それに合わせて、新装なった富山市科学博物館にて、関係各位のご努力下、今までの「雪のデザイン賞」の入賞作品が多数、展示されました。

この「雪のデザイン賞」が、科学とアートの出会いのある、他に類を見ないコンペとして広がりを持つことは大変喜ばしく思います。

そしてこのコンペに益々質、量ともに創造性豊かな作品が集まり、雪の科学館が、ひいては加賀市が広く科学、文化を発信していくことを期待します。



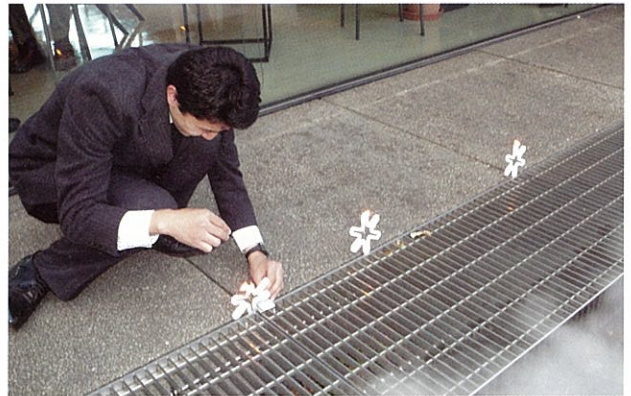
表彰式で講評を述べる川上元美審査委員長（11月3日）



展示風景



銀賞作品のタペストリーについて語るパイバ



受賞者の交流会の際、CRYSTAL CANDLE（同等品）に点火してみせる北村氏



列品解説風景。入選の木戸優紀子さん



交流会の参加者



展示風景



雪のデザイン賞作品（第3回までの寄贈分）の移動展が富山県立科学博物館で開催された。（9月26～29日。富山での雪氷学会全国大会の期間に）

第4回 雪のデザイン賞 入賞作品



銀賞 "CONNECTION" (タペストリー)
Baiba Ritere (ラトビア)



銀賞 しもばしら (ガラス)
田中 雅樹 (神戸市)



銅賞 CRYSTAL CANDLE (ろうそく)
北村 ひでき (長野市)



▲ 奨励賞 UNRESTRAINED (絵本)
石田 ゆき (北海道岩見沢市)



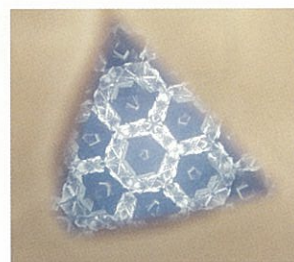
◀ 奨励賞 First snow
(オブジェ)
Liga Skarina (ラトビア)



▲ 奨励賞 雪の書 (タペストリー)
戸瀬 秀昭 (金沢市)



◀ 奨励賞
Exterior View, Interior Expanses
(万華鏡)
吉見 佳代子 (愛知県蒲郡市)



(上からのぞくと)



▲ 奨励賞 ゆきだるまスタンプ (陶芸)
堂前 守人 (北海道函館市)

平成19年度報告 子ども雪博士教室（4年目）

文部科学省・国立科学博物館の委託事業として実施してきた「子ども雪博士教室」は、平成18年度で3年間の委託が終り、19年度は館の事業として引き継いで実施しました。

19年度は「教室」を11回開催し、「まつり」では、「子ども一日館長」に活躍してもらうなど、子どもの出番を増やす試みをしました。各回の教室の概要と、参加した子どもの感想を紹介します。

20年度の予定は、今号20ページや「子ども雪博士新聞第4号」をご覧ください。

2007/4/21 白山の雪形をさがそう

<指導> 神田健三（館長）ほか

山の雪どけによってできる雪形の楽しみ方を紹介した。白山の雪形について知っている大人4人からも話をしてもらい、立体模型も使って解説し、その後、外へ出て観察した。（子ども4名 大人6名）

*山はいっぱいあって見分けがつかないと思っていたけど、雪形が目印になるなと思った。（小1）

5/3 しぶき氷のふしぎ

<指導> 小荒井実（福島県環境アドバイザー）

小荒井氏は、猪苗代湖のしぶき氷を「発見」し、研究してきた。写真展「しぶき氷の世界」の初日に開催し、大人だけの出席も募った。参加者は、スライドを使った和やかな雰囲気のお話に聞き入った。

（子ども13名 大人27名）

*氷が変な溶け方をすることが分かって面白かったです。（小3）

6/23 草木染めに挑戦しよう

<指導> 沖倫子（金沢高校教諭）

草木染めは、合成染料を用いず、植物や昆虫など天然の染料によることを実験で紹介し、次に、ハンカチを染めることに取り組み、作品に仕上げた。湖北小の理科室を借りて行った。（子ども19名 大人8名）

*いろんな色に変わってびっくりした！また行きたい！（小3）



「草木染め」の教室

7/7 鏡を使わない万華鏡作り

<指導> 小林朝美（北陸電力エネルギー館）

透明なセロハン用紙を丸めて作った筒にビー玉を入れ、その筒に多色のビニールテープを貼って完成。筒の中でビー玉を動かすことにより、ビー玉に反射する色とりどりの世界を楽しんだ。

（子ども20名 大人10名）

*テープを貼る場所やテープの太さを変えただけでいろんな万華鏡ができて面白かったです。（小3）

7/21 氷であそぼう

<講師> 神田健三（館長）

氷のペンダント、氷のレンズなどを作ることにより、金属の熱の伝わり方を学んだ。又、氷に塩を付けてたこ糸で釣る、氷釣りを楽しんだ。中庭のテラスで行った。（子ども15名 大人8名）

*氷が塩で釣れることがすごいと思った。（小3）



氷がつれたよ！

8/5 子ども雪博士まつり

<指導> 小野延雄（国立極地研究所名誉教授）他

2人の「子ども一日館長」や、オンボラート・アルプホルン金沢の皆さんの活躍が、雰囲気を盛り上げてくれた。小野先生の「氷と熱、南極氷」では、自ら考案した六花モールドを使って実験し、又、何万年も昔の空気を含んだ南極氷が溶けていく時の音を楽しんだ。

「氷のレンズ」を作り、太陽光で紙を焦がすことを目指して、子どもたちは熱心に取り組んだ。「ピースで雪の結晶」は、大人も参加する人気コーナーだった。



子ども一日館長 藤田君（左）と東さん

ハガキにマーブリング、鏡を使わない万華鏡、切っても切れない氷、ナットで作る六花の雪、お持ち帰りの「虹」、空き缶分光器、マジックを楽しもう、氷であそぼう、せんこう花火のお話、片山津の氷室跡のお話など、沢山のコーナーや教室で終日にぎわった。
(子ども167名 大人237名)



アルプホルンと腹話術のケンちゃん



氷レンズで点火に挑戦

8/25 ウィルソンの霧箱

<講師>戸田一郎 (サイエンスプロデューサー)

「霧箱」は、イギリスの物理学者ウィルソンが発明した霧を発生させる装置。これを改良した「戸田式霧箱」を使って、肉眼では見えない宇宙線や放射線の通り道を観察した。(子ども20名 大人13名)

*霧箱に石を入れたら線香花火みたいになって、白いスジが出て面白かった。(小2)



「ウィルソンの霧箱」の教室

9/8 空気のすごい力

<指導>月僧秀弥 (坂井市立春江中学校教諭)

空気の力を利用して重いボーリングの玉を掃除機で吸い上げるなど、工夫されたいろいろな実験や工作を行い、気圧や空気の役割について、子どもたちに気付かせた。

(子ども10名 大人6名)

*空気のかでボーリングの重いボールが持ち上がったのがすごかったです(小5)

10/20 台風・竜巻のふしぎ

<指導>坪木和久 (名古屋大学准教授)

台風・竜巻について説明した後、ペットボトルの中でドライアイスから出る霧をハンドクリーナーで吸い上げ、竜巻のような渦を発生させた。又、水の入った2本のペットボトルをつなぎ、回転により水が移動することを確かめた。(子ども34名 大人20名)

*ペットボトルの中に竜巻ができて面白かった。家でもできそうだったのでやってみよう。(小2)

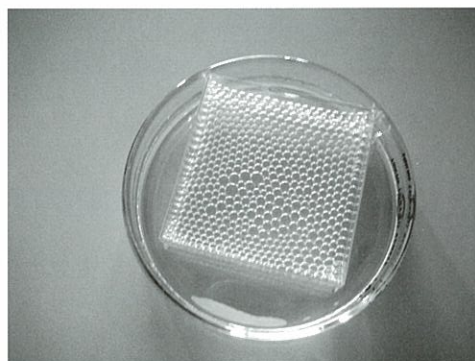
12/1 結晶のふしぎ

<指導>河田脩二(金沢大学名誉教授)

細いストロー管で石鹼液に空気を吹き込み、できた小さなシャボンの泡の並び方を観察し、原子や分子のつながり方など、結晶について学習した。

(子ども18名 大人11名)

*ダイヤモンドも炭の仲間なんて初めて知りました。(小4)



シャボンの泡の並びで結晶を考える

2008/1/26 雪の実験と観察

<指導>神田健三 (館長)

ペットボトルで人工雪を作る平松式や、アイスピアジョッキを使ったダイヤモンドダスト実験などを行い、展示室に移動してムライ式人工雪を観察した。(子ども21名 大人16名)

*きれいな人工雪ができて嬉しかったです。家でも雪を作ってみたいです。(小2)

2/11 雪と氷のABCカルタ

<指導>中谷香代子 (英語塾講師)

アルファベットの練習をした後、2グループに分かれて競いあった。今年はマットを敷き、低学年グループは座って行い、もう1グループはテーブルで行った。(子ども18名 大人10名)

*ABCカルタをやってみたら、英語が少し読めるようになりました。(小5)

▶ 中宇吉郎科学奨励賞

中谷博士の業績を記念し、若い人たちの科学研究への取り組みを励ますこの賞が、平成19年度は、雪氷学の若手研究者の部は、海洋研究開発機構地球環境観測研究センターポスドク研究員の紺屋恵子さんに、市内中学生の部では東和中学校3年の水上優君に贈られました。

紺屋さんは、北海道大学大学院で氷河の野外研究に取り組み、気候変動の指標となる氷河の質量収支について、野外データをもとにして短波放射量と気温だけで氷河の融解量を高い精度で推定する数値モデルを作ったことが評価されました。

水上君は、ヒートアイランド現象をヒントに、場所による気温変化の違いや、動橋川の水質調査などの環境調査を科学部で行ったこと、生徒会長としてリサイクル活動を推進したこと、理数系の優秀な成績、科学的な探究心や粘り強い取り組みなどが評価されました。

表彰式は1月28日、テリーナホールで開催され、式の後、紺屋さんが「氷河の研究」の題で記念講演を行いました。



市長から表彰状を受ける水上君と紺屋さん

新たに全国の中学生対象の賞

中谷宇吉郎科学奨励賞は、平成20年度から全国の中学生から科学研究作品を募集し、優秀な生徒1名（又は1団体）に授与されます。これまで募集対象を「加賀市の中学3年生」としていたのを、全国の中学生に広げるもので、たくさんの応募が期待されます。

この他「加賀市の小学生」の部門も新たに設けられ、「雪氷学の若手研究者」の部門については従来通りです。

中学生部門の応募要項

（詳しくは加賀市教育委員会のホームページをご覧ください。）

【応募方法】

- ☆学校・科学館等からの推薦により応募する。未発表のオリジナル作品であり、1名（団体）1点までとする。
- ☆手書き又はワープロによるA4サイズの横書き原稿による。手書きの場合は400字詰原稿用紙20枚以内、ワープロの場合は40字×40行の書式で5枚以内。
- ☆実験や採取による実物は原稿に貼らず、写真や手書きの図等で示す。

【募集期間】平成20年11月1日～30日

【賞】トロフィーと副賞（30,000円の図書カード）

【表彰式】平成21年2月中の土曜日、雪の科学館で行う。
（本人及び引率者又は保護者1名の旅費を支給）

【問合せ・申込先】加賀市教育委員会学校指導課

（〒922-8622加賀市大聖寺南町二41 ☎0761-72-7975）

▶ 「どちらから？」アンケート結果

70%の高回答 - 1年間の集計 -
関西から28% 関東からはアクセスの課題も



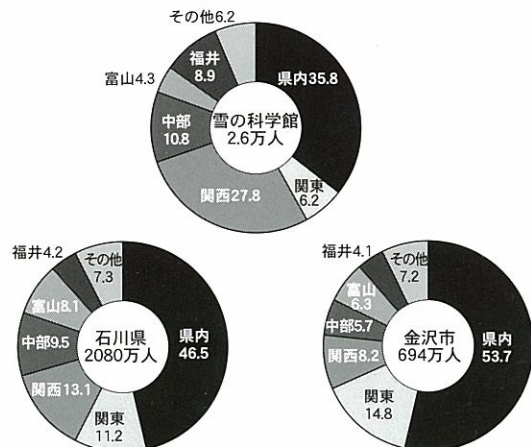
地図にシールをはるアンケート

2006年11月から1年間、当館は入館者がどこから来られたかを調べるため、受付の横に設置した地図に小さなシールを貼ってもらう方法でアンケートを行いました（複数で入館する時はシールに人数を記入）。回答数は18,160人で、この期間の入館者数25,799人の70%という高い回答率でした。

1年間の結果を集計すると、県内の35.8%に次いで多かったのは関西で27.8%、3位が中部の10.8%で、関東は6.2%に止まりました。隣県の福井は8.9%、富山は4.3%でした。

県内は、加賀・金沢・その他の3つに区分して集計しましたが、その他が12.4%、加賀が12.1%、金沢は11.2%でした。石川に続いて県単位で多かったのは、2位が大阪の12.3%、3位福井の後は、愛知7.1%、京都5.8%、そして、兵庫が富山と同じ4.3%、滋賀3.1%、東京2.8%の順でした。

次に、この調査と同じ頃の石川県と金沢市の公表されたデータと比較してみました。（統計期間：県と金沢市は2006年1月から、館は2006年11月からの各1年）



これらのグラフから、当館の入館者には① 県外からが多い、② 関西から特に多い、③ 関東からは少ない、④ 富山より福井からが多い、という傾向があることがわかります。

当館の入館者が関西からが多く、関東からは少ないのは、地理的位置や交通の便も関係していると考えられます。関西からは、電車1本、2時間余りで来れるという便利さがあります。一方、関東などからの空路利用を考えると、小松空港から加賀市方面へのアクセスの改善（現在、バスの運行はない）が大切だと考えられます。

平成19年度 館の対外的な活動

■講演・発表

- 7.12 市民会館で(7.21は館で)加賀市観光ボランティア大学講座「知られざる宇吉郎の世界-子どもに語ろう 先人の足跡-」(神田)
- 9.27 日本雪氷学会全国大会(於 富山大学)で発表「続々白山の雪形」(納口・神田・小川)
- 12.1 第3回生活環境懇話会(日本熱物性学会研究会)(於 片山津温泉まるや)で講演「雪:中谷宇吉郎の世界」(神田 以下同)
- 12.10 日本雪氷学会北信越支部創立20周年記念講演会(於 アトリウム長岡)で「宇吉郎と雪の科学・文化による交流と触発を求めて-中谷宇吉郎雪の科学館の13年-」
- 12.13 小松高校のスーパーときめきサイエンス特別講義「中谷宇吉郎と雪の科学」(1年理数科クラスに)
- 2008.2.8 能美ロータリークラブ(於 寺井社会福祉センター)で卓話「中谷博士と雪のお話(+白山の雪形)」

■実験教室・出前

- 5.30、6.16、7.7、10.13、11.10、12.8、1.21 錦城小「雪の教室」でふるさと塾の一つとして「雪と中谷博士」(神田)
- 8.12 文化会館で加賀青年会議所主催第4回子どもミュージカルの際、氷のペンダントのコーナー(角谷・石川)
- 9.29 雪氷楽会in富山(於 富山市科学博物館)で「ダイヤモンドダストを作ろう!」(加藤・森野・佐藤・神田)、「チンダル像と空像」「氷のペンダント・氷のレンズ」(神田・竹井)



- 2008.2.15 山代幼稚園で親子お楽しみ会。紙芝居、氷のペンダント、ビーズで結晶(小橋)

■執筆

- 12. 石川県白山自然保護センター研究報告第34集に、「白山の雪形」(小川・納口・神田・和泉)(p.45~53)
- 12.12 北國新聞夕刊「舞台」に「雪の科学と文化による交流」(神田 以下同)
- 2.28 信州大学物理同窓会WEBに「中谷宇吉郎雪の科学館と信大時代」<http://www.supaa.com/>
- 3.15 石川県小中校長会会報に、「シリーズ「学びの広場」」「雪氷のふしぎ体験と宇吉郎の子ども時代」
- 3.15、22 朝日新聞石川版 シリーズ「ミュージアムの風」に連載(①氷や雪の魅力を実験で、②湯川秀樹と短歌の交流)(5.2まで5回)

■後援・協力

- 9.21~11.4 北海道大学総合博物館「湯川秀樹・朝永振一郎生誕100年記念展」(秀樹と宇吉郎の交流に関して協力)
- 12.5~14 金沢大学資料館、12.18~24 金沢21世紀美術館「湯川秀樹・朝永振一郎生誕100年記念展」(秀樹と宇吉郎の交流に関して協力)
- 2.11~29 韓国のソウル明洞Laneige店(Amore Star)で「Laneige Snow Gallery」(雪のデザイン賞の作品貸出で協力)
- 3.10~(4.6) 福井県大飯郡高浜町の内浦公民館で「てんこもり企画第3弾「雪であそぼう」」(雪結晶等のパネル、実験教材等の貸出で協力)

内浦公民館の雪イベントについて、公民館長の土本さんから大変丁寧なレポートをいただきました。その一部を、主に写真で紹介します。

「今年も80cmの積雪があり、雪は厄介者で、毎日が雪との戦いで、この雪で何とか展示企画したいと、高さ4m、幅25mほどに積み上げ、これで子どもたちの遊び場を作ろうと考えていましたが、もう少し雪の概念を変えようと考えてみました。インターネットでたどり着いたのが中谷宇吉郎博士でした。雪の科学館を訪問し、説明や実験を見学しましたが、見るもの聞くもの驚きと感心で、当公民館での展示協力をお願いしました。」

そして・・・、「毎日のように入館者に体験してもらい、うれしい悲鳴です。このような企画は、毎年1ヶ月間やれるよう考えていきたい。」とのことで、楽しかったことが伝わってきます。



玄関に、中谷博士の言葉を貼り出しました。



氷のペンダントは、はじめ雪や天然氷でやりましたが厚み不足でうまくいかず、紙コップを切って容器にし、氷を作りました。人数分作るのが大変でした。



雪の折り紙づくりでは、正六角形の紙作りから始め、館に展示してある鈴木先生の折り紙パネルにある14種類+2種類(オリジナル)を完成させました。

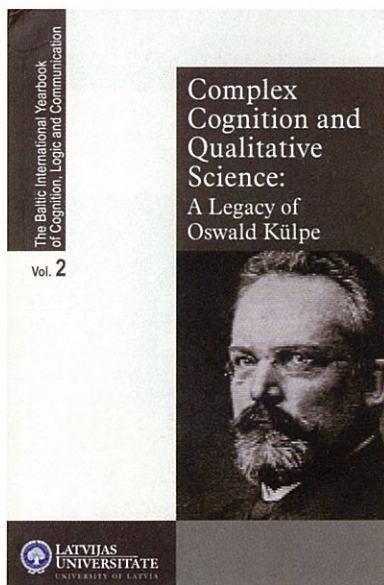
ラトビアとの交流は、2005年秋に首都リガで開かれた「雪と氷との対話展」が大きな出来事で、1年後の06年12月、今度は館が写真展「ラトビアの冬」を開き、その機会にペーテリス・ヴァイヴァルス在日ラトビア大使が加賀市に来訪されました。（→通信14号）

2007年5月には両陛下が初めてラトビアを訪問されましたが、ラトビア大学での歓迎レセプションで、「対話展」のことが両国の素晴らしい交流として語られました。ラトビア大学から出版された『バルト国際年鑑』には、宇吉郎への関心の高さから、『科学の方法』の抄訳（英語）が掲載されました。

第4回雪のデザイン賞のコンペには、ラトビアから22点もの応募があり、その中からバイバ・リテールのタペストリーが銀賞に選ばれました。表彰式に出席のためバイバが来訪し、市民と楽しく交流する機会が生まれました。沢山の応募があった背景には、ラトビア側が応募要項を自国語に翻訳し、PRするという積極的な協力がありました。



両陛下に魚の化石の説明をする自然史博物館の学芸員ティアナ（手前）。「雪と氷との対話展」を担当した彼女は「対話展」についても触れ、皇后様からはご質問があったとのこと（5月23日）



『バルト国際年鑑』
“The Baltic International Yearbook of Cognition, Logic and Communication vol.2” の表紙。中谷宇吉郎の『科学の方法』の抄訳と、樋口敬二氏の序文などが掲載されている。



来日した銀賞のバイバ（右から2人目）と友人のアニタ（右端）。山田芳子さん親子（左の2人）は名古屋国際空港から加賀まで車で案内してくれた。バイバの来日では、いろいろな人の協力がえられた（11月1日）



バイバと市民の交流会。市内の芸芸関係者などが多数参加し、楽しく盛り上がった（11月2日。冬の華で）



在日ラトビア大使館による独立記念パーティーに出席し、ペーテリス大使に挨拶する神田館長（11月16日、ホテルオークラで）



デザイン賞やバイバの訪日はラトビアでも大きく報道された。沢山のデザイン雑誌や新聞が、ラトビアから館に届けられた。

2007年に、館と韓国の新しい関係が始まりました。それは、ラネージュ（フランス語で「雪」）という化粧品のブランドを持つ韓国のアモレバシフィック社（以下、ア社と略記）との、雪を介した文化交流です。

ア社からはしばしば館への来訪があり、実験や展示を通じて交流が始まり、9月3日には大幸市長との会談も行われて、文化交流についての合意がすみました。そして、ア社から雪のデザイン賞への協賛の申し出があり、第5回のコンペには、これにより新たに「ラネージュ賞」が設けられます。

ア社が主催する韓国からの「雪のツアー」が2008年1月18日から3日間、当館など加賀市を訪れました。又、2月11日から月末まで、当館から貸し出した雪のデザイン賞の作品により、ソウル市内で展覧会が開催されました。オープニングに出席するため市長が訪韓し、交流を深めました。

又、韓国の大田科学高校は、小松高校と、生徒の科学研究などで提携・交流していますが、小松を訪れる際にしばしば来館し、実験などを熱心に見学しています。



ソウル明洞のア社ビルで、雪のデザイン賞作品の展示「スノー ギャラリー」が開かれた



2007年9月3日、市長とア社の初めて会談が行われた。ア社は博物館も経営しており、雪を中心にした幅広い交流について話合われた



オープニングに出席するため市長が訪韓して交流を深め、徐社長と「ラネージュ賞」などの協賛の約束が交わされた（2月11日）



韓国からア社が主催した雪ツアーが来館した（2008年1月18日）



大田科学高校の生徒が来館し、筋状雲などの実験を熱心に見学した（10月29日）

(1) 藤岡由夫先生の御配慮

人づてに高円寺の気象研究所に勤めていた私に中谷先生が危篤らしいとの知らせがあり、急ぎ東大付属病院に出向きました。病室は産婦人科病棟とのことでしたが、ベッドは既に別棟に移され、来訪の皆様は中庭で待機している、と看護婦さんに教えられました。

中庭で茅先生と雑談されている中に入れさせて頂き、程なく、先生が亡くなられたという連絡が入りました。その折、病因確定のため手術をする事と、確定に時間がかかる事も伝えられました。待機する覚悟をしていましたら、一面識もない藤岡由夫先生がやってきて、「君、手が空いているならタクシー呼んで来て、僕と一緒に家まできてくれ!」と言われました。緊張感が漲っていたのでしょう。即座に御依頼に応えました。

タクシーの車中で、先生は頻りに「中谷君の雪の仕事は、ノーベル賞を受賞するに値しているのに受賞出来なかったのが残念でならない」と、又、「最後に冷たい手術台では可哀想だ」とも繰り返し言うておられました。家が本郷ということもあって、乗って間もなく家の前に着きました。先生は車を降りるや否や大声で奥様を呼んで、客用の布団、枕、敷布、寝間着を玄関に出すようにと言われました。玄関に出し揃えた物は、タクシーで病院の中庭に運び、病院関係者に手渡されました。その後の扱いは、病院側の裁量という事だったので、詮索はしませんでした。冷たい手術台から解放され、さっぱりとした気持ちで他界なされたことと心に納めました。

時折、三橋鷹女の句「白露や死んでゆく日も帯締めて」に出会うと、その度に、藤岡先生のことが回想されます。藤岡先生の妹・綾様が中谷先生の最初の奥様であり、いわば御兄弟であっただけに、先生への思いは格別に深かったこととと思っています。

(2) 花冷えの通夜の日の事々

北大の現役の人に代って、お通夜まで手助けになる事があればと思い、仕事の間を見計らって先生宅にお邪魔し、雑用処理の手伝いをする事にしました。

葬儀全般の差配は、先生の親友の岩波書店専務の小林勇氏と、中谷教室の助手であった菅谷重二氏の補

佐役とで仕切られ、私には気象関係来訪者の受付が割り当てられました。

手透きの時は仲間内で雑談しておりましたが、その話の中に日本医師会会長であった武見太郎先生からの電話を受けた折の伝言があり、内容は、香典五十万円、花環を一番先に記帳し設置しておくこと、とありました。念の為と、手が空いていた折に花環の見回りをしました。柩の置かれた部屋の庭の、柩に一番近い所に武見先生の花環が設置されていました。序にと思い、受付をしていた関係で香典帳を見させて頂きました。既に武見先生と同額の方がおられ、多分小林勇氏でなかったかと今推察しています。何れにしても当時では破格の額なので、お二人の無念な思いと濃密な友誼を垣間見させて頂きました。曖昧な記憶が頼りで誤認もあるやと危惧しておりますが、当時受けた感動は今でも脳裏に焼き付いております。

通夜には多くの気象庁関係者が弔問されました。その中で、中谷先生と大学同期の和達清夫気象庁長官が急に来られ、記帳の折、「花環を気象研究所から出すように所長に言うておいたから」と告げられました。夕刻おそく小平吉男気象研究所長がお見えになり、私に「長官から花環の話があった。総務の方に話しておくから」と言われました。一寸残念な気持ちもしましたが、告別式に間に合えば良いと思い、その後は雑踏していた受付の仕事に追われる事になりました。

今は、気持ちにゆとりを持ち、丹念に記録を残しておけば!・・・と、後悔しています。



宇吉郎の葬儀の参列者。1962.4.14青山斎場で（撮影：小口禎三）

*北大物理出身（昭和19年卒）の宇吉郎門下生。気象研究所などで、気象測器の開発を行い、それがオゾンホール発見の糸口にもなった。

▶ 1枚の写真から

館と雪と光が作ったデザイン

1月27日午前10時頃、2階エントランスホールの壁にこんな影ができました。六角の屋根に積もった雪が、とけたり、下へずれてできたすきまに太陽の光がさしてできた影で、館と雪と光が作ったデザインです。



館のスロープでパラグライダー

館前のスロープで、ある日中学生たちがパラグライダーの練習を始めました。見ていて、広々とした感じがしましたが、もし大きく飛び立ったら心配で、飛び立つまでの練習にとどめましょう。

アフリカの教師グループ

近年、海外から来日したグループを、国際交流団体が当館に案内してくるケースが増えており、館も国際色豊かになりました。この写真は、アフリカの教師グループが来館したときのもので、実験などを熱心に見学しました。



編集後記

19年度の館の活動の特徴の1つは、企画展を4つ続けて開くことに挑戦したことで、それは、18年度後半から雪のデザイン賞募集に関連させて開いた写真展「ラトビアの冬」など3つの企画展から連続したものでした。こうした取り組みをしてみても、宇吉郎と雪氷という、ある意味でせまいテーマの館であっても、企画のテーマは潤れることがないという感じがします。それは、宇吉郎と雪氷の魅力が尽きないということでもあり、同時に、タイムリーな積極性の発揮が重要、ということでもあると思います。

館の近年の活動状況は、体験、デザイン、国際、宇吉郎のゆかり、環境、のキーワードで表すのが適当だと考えています。これらを並行して、あるいは組み合わせることは、大変でもあります。新しい経験の実りがもたらされるものだと思います。

この館通信は、1年間の館の動きと新しい年度の計画を

紹介するものなので、できるだけ包括的に紹介するよう努めています。しかし、企画展などの内容を記録するには限度があり、漏れた内容もあります。しかし、それは他日に期すことにして、前へ進みたいと思います。

今号に宇吉郎の葬儀の思い出を書いてくださった小林寿太郎氏が1月15日、ご逝去されました。小林氏は、気象研究ノート「次世代へ伝えたいこと」(2007)に「ゾンデ開発の余韻 - 湿度とオゾンの計測 -」を執筆されています。

又、故東晃氏の夫人、璋子さんが3月17日、ご逝去されました。2年前の夏、追想集『旅 東晃とともに』の出版記念の会でお会いした頃は、元気に世界を駆け回っておられましたのに…。

ご冥福をお祈り申し上げます。

(k. k.)

中谷宇吉郎雪の科学館 平成20年度の行事予定

月	企画展など	月	子ども雪博士教室
4	企画展 4/24～7/15 雲三昧(くもざんまい) - 村井昭夫・鶴山義晃写真展  波状高積雲 (撮影:村井昭夫)	4	4/26(土) 10時～11時半 雲の模型を作ろう 村井昭夫さん(石川県教育センター)
5		5	5/17(土) 10時～11時半 気象衛星ひまわりの画像で楽しもう 鶴山義晃さん(三重県総合教育センター)
6		「私の宇吉郎」シリーズ9 6/28(土) 13:15～ 片山津・テリーナホール 磯崎 新氏 講演会 「雪を受ける両の掌 - 私の建築論」	6
7	特別展 7/17～10/28 「北極圏 アラスカ」  アラスカのオーロラ (撮影:堀田東)	7	7/19(土) 10時～11時半 氷であそぼう 神田健三館長
8		8/3(日) 9時～16時 子ども雪博士まつり 南 繁行さん(大阪市立大学)ほか 楽しい実験・工作・お話など。子ども「一日館長」も。	
9		8/26(火) 14時～15時半 温泉水を調べよう 三津野真澄さん(石川県立大聖寺高校)	
10	第5回雪のデザイン賞募集記念 11/20～12/31 クリスマスの雪デザイン  デパートのクリスマスポスターの一例	9	9/13(土) 10時～11時半 恐竜は生きている 後藤道治さん(福井県立恐竜博物館)
11		10/18(土) 10時～11時半 青空と夕焼け 竹井 巖さん(北陸大学)	
12		11/15(土) 10時～11時半 シャボン玉の中の雲 皆巳幸也さん(石川県立大学)	
1	〈作品募集〉 12/1～2009/4/30 第5回 雪のデザイン賞 	12	
2		1/24(土) 10時～11時半 雪の実験・観察 神田館長	
3		2/14(土) 10時～11時半 氷のステンドグラス 竹井 巖さん(北陸大学)	

* 予定が変更になることもあり、ホームページなどでお確かめ下さい。

「雪の科学館メールマガジン」会員を募集

館や宇吉郎の情報を携帯電話やパソコンに定期的に配信します。登録は無料、配信頻度は月1回程度です。
 〈登録先アドレス〉
<http://www.city.kaga.ishikawa.jp/magazine/index.php>



QRコード対応の携帯電話をお持ちの方はこちらからどうぞ

年末年始も開館します

休館日は水曜(祝日は開館)だけです。

館のメールアドレスが変わりました

(新) yuki-mus@angel.ocn.jp